essay

「お祭り助役」百年の夢

北海道教育大学岩見沢校　保健体育科
教授　進藤　貴美子

新篠津村青空まつり　ねぷたと跳ねる荒馬

それは奇跡としか言いようのない時間であった。今年で十四回の新篠津村青空まつりは、午後から夜にかけて豪雨の予報である。当村第一自治区のみなさんの指導で仕上がった岩見沢校のねぷたは雨に備えてビニールをかけていた。

ねぷた運行の先駆けとして跳ねる荒馬の踊り手たちも、しきりと空模様を気にかける。ところが、各自治区制作の山車に灯がともり、いよいよスタートというころから雨があがる。ねぷたのビニールをはずし、「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声にのって、荒馬の門付けが始まる。八月とはいえ、肌寒い夜空に趣向を凝らした山車やねぷたの灯が輝き、端まで見通せる程の小さい村の市街地は、本場津軽の熱気を思わせる。

踊る学生達は「北海道文化論」「民俗芸能」の受講生である。沿道の観客の声援を得て、その踊り姿はいつになく力強い。飛び入りのご夫婦を迎えて、どの顔も笑みがこぼれる。お花のあがった商店前で、商売繁盛の願いを込めて、二頭の荒馬が勇壮に跳ねる。たしかに、学生達の踊りは青森県今別町に伝承される荒馬の模倣である。

しかし、半年かけて習得してきた荒馬は、同様に仕上げてきたねぷたと共に、この夜、彼らのものとなった。それは地域の「文化的実践の場」に加わるという幸運に恵まれたからにほかならない。

この幸運な巡り合わせは五年前にさかのぼる。自他共に「お祭り助役」を認める三浦宏一助役（本年十一月退任）が大学をたずねてみえた。「十年かけて各自治区が手づくりの山車を作って来た。十年目はその山車に祭囃子を乗せたい。」「たとえ村から出て行ったとしても、祭りのときには帰りたくなるものを残したい。」「おれの目の黒いうちにそんな祭りができるとは考えていない。」「五十

◀青森県三戸郡田子町の田子神楽習得風景。太鼓を叩いている方が筆者。

略歴

1947年、神奈川県小田原に生まれる。1969年、東京教育大学体育学部を卒業し、都立高校に13年勤務する。1982年、北海道教育大学岩見沢校に赴任。保健体育科教育専攻、特に身体表現、舞踊教育の教授学研究を専門とする。芸能伝承地を訪ね、保存会の指導で各種の民俗舞踊を体得する活動を、学生達と続けている。

年後、百年後のこどもたちに誇れるものを残したい」。

江差出身の助役の体には今も故郷の血が、祭りのエネルギーが流れている。その心意気に共感し、思わず助役の手を握りしめてしまった。

各地の芸能を学び、その教材化を模索して二十数年が過ぎようとしている。長い年月をかけて体から体へと手渡されて来た芸能には先人の知恵が凝縮している。一人は自然によって生かされている」ことを、感得していた人々の儀礼行為としてのお祭り。そこで演ぜられる歌や踊りは人々が安全に生き延びるための共同構成員の想像であり、創造であった。そして、芸能の内実でもある身体技法には弱体化した現代人の身体を闊達にする術が満ちている。しかし、今日の学校社会は地域の伝統をていねいに学ぶ程のゆとりはない。促成栽培のような教育が横行し、目先のことに目が奪われている現代に、百年後を見据えてこどもたちのための村づくりを考えている人がいる。

「お祭り助役」の大いなる構想に応えてくれるであろう作曲家を紹介した縁で、以後毎年、青空まつりの見学者となる。平成二年、初めて囃子が山車に乗る。それは祭囃子と呼ぶにはまだたどたどしい演奏ではあった。しかし、「お祭り助役」のゆかた姿は晴れやかで、うれしさを隠しきれない。

「山車が広場に戻って来たら、カアちゃんがそっと寄って来て、『お父さん、よかったですね。これで山車に魂が入りましたね』と言ってくれたよ。どうだ、うちのカアちゃんすごいだろ。さんざ迷惑かけて来たのになあ。」と誇らしく語る。山車作りの先頭に立って、自ら設計図を引き、金槌を握る。夜なべ仕事の連続で体調を崩し、入院という事もあったという。

そして、四年後の今年。十基の山車やねぷたがすっかり片づくと、まさに予報どおりの豪雨となった。「念ずれば現ず」、ひょとしてあの一瞬の晴れ間は「お祭り助役」が導いてくれたのかもしれない。テントの中で、激しい雨音を音楽のように聴きながら、学生達と祝杯をあげた。